

ルネサンスにおけるスピリトゥス概念と生命論

比留間亮平

一 はじめに

今日、生命科学がその技術的可能性を急激に増大させているのに伴い、生命の定義に関する言説もかつてない高まりを見せていると言われるが、そのようなバイオロジカルな意味での生命が議論されるという状況は決して現代に特有なものではない。程度の違いこそあれ、近代以前の世界においても、あるいはいわゆる医学的なものが存在している文明世界ならどこでも、バイオロジカルな意味での生命や生体機能に関する理論は当然存在している。本論はルネサンス期におけるスピリトゥス（霊、精气）概念に焦点を当てることで当時の人間

観及び生命観を考察するものであるが、そこで展開された医学的、生命科学的な議論は近代的なそれとはその性格を著しく異にするものであつても、やはり一定の合理性と体系性を備えたものだった。一七世紀以降、デカルトやボイル、ハーヴィらにより世界観の根本的な転換が図られる中で生命観も大きな変化を迎えることとなるが、そのような変化は決して科学的言説の存在しない真空状態から生じたものではなく、中世的、ルネサンス的な「科学」を背景としながら徐々に形成されていったものだと言える。その中で本論は中世的、ルネサンス的な科学的言説の一つであるスピリトゥス概念に基づく生命観を扱うことで、近代的生命観を考察するための一つの予備的作業を行うことを目指すものである。

いわゆる人間論の文脈においては人間を霊 spiritus、魂 anima、それに肉 corpus (あるいは caro) からなる存在として捉える古典的な理解がルネサンスに至るまで一般的である。「靈魂」という単語からも分かるとおり日本語における霊と魂とは密接に関係しており、一般的な用語法において概念的に明確に区別されているとは言いがたいと思われるが、このスピリトゥス(希ブネウマ)とアニマ(希プシユケー)に関しても同様な面があり、これらの語が意味する内容はある程度までは重なり合っていると見える。これらは共に人間の「靈的次元」、非物體的なあり方に関わるものであり、いわゆる霊肉二元論的な枠組みに従えば共に「霊」に属する事柄とされるが、アニマがある意味で人格性を有する自己自身そのものを指すとするならば、基本的にスピリトゥスとは人間存在の基盤となる非人格的な原理を意味する。それは人間に対して基本的に外在する、あるいは内在するにしても少なくともその起源を外部に有する神的な原理であり、特に知性的な意味も含む原理といった意味で用いられる。それは人間を靈的に生かすものであり、また共に人間が信仰や観想などによって目指す

べきものでもあった。

このような霊・魂・肉に関する理解は、ルネサンス期の著名な人文主義者であり宗教改革者でもあったロツテルダムのエラスムス（一四六六頃—一五三六）の著作にもはつきりとした姿で現れている。エラスムスはその『エンキリディオン』の第八章、「人間の三つの部分、霊・魂・肉について」と題された章においてこの問題を論じているが、そこで「霊」はその起源を天上に有する最上の部分、「肉」は罪に由来する最低の部分とされる一方、知覚と自由意志を有する「魂」はこのどちらにも向かいうる中間的なものとされる。

肉的なものは全て醜く、霊的なものは全て完全であり、魂的なものは全て中間的で無記的です。……
（霊と肉との）いずれに向かって方向を転じたとしても、魂が近づくものが何であれ、そのものとなるでしょう。

この後エラスムスは魂が肉を離れ霊へと向かうよう勧告するが、ここからもエラスムスが意思を有する主体としての魂と天的な原理としての霊という図式に従っていることは明らかだろう。

しかしながら、スピリトゥスはこのような「霊」と訳しうる文脈だけでなく、全く異なった意味でも用いられる。それは例えばエラスムスと同じくルネサンス思想家に属するフィチーノ（一四三三—九九）の『三重の生について』などにおける以下のような用法である。

医者はこれ（スピリトゥス）を血液の気化したものと定義しており、その性質は純粹にして稀薄、熱く透明だとされる。また、これはいつそう稀薄な血液から心臓の熱によつて形成され、脳まで駆け上り、そこで靈魂が内感覺と外感覺を働かせるために間断なく用いられる。かくして血液はスピリトゥスに、スピリトゥスは感覺に、最後に感覺は理性に、おのおの仕えるのである。

ここで述べられているのが医学的概念として用いられるスピリトゥスであり、これは一般に「精氣」あるいは「氣息」と訳される。それは人間の物理的な身体に深く影響を及ぼすある意味で物質的な存在であり、また意識中枢としての魂と感覺器官としての身体をつなぐ媒体として魂にも大きな影響を与える¹とされる。以下ではまずこのようなスピリトゥス概念が成立し、受容されていった過程をごく簡単に概観し、その後ルネサンスにおけるその変容について論じることとする。

一 一 古典古代におけるスピリトゥス

西洋思想史上の多くの概念がそうであるように、アニマとスピリトゥスに関する議論もその源泉のかなりの部分をアリストテレスに負っているが、中世及びルネサンスにおいて展開された靈魂を巡る諸議論はほぼアリストテレスの『靈魂論（デ・アニマ）』に対する一連の注釈であると言つてよい。アリストテレスは『靈魂論』において靈魂を「可能的に生命を持つ自然的物体の第一の現実態」と定義する。アリストテレスは靈魂を生命

活動そのものとし、それゆえ靈魂と身体とを分割不可能なものと理解する。靈魂とは生命を持ちうる自然的物体に形相として内在してそれを現実態とする、すなわち実際の生命活動を完成させるものであり、また自然的物体¹¹身体とはそのような靈魂を宿しうる質料的存在である。靈魂は現実に生命活動を行っている限りにおいて認められるのであり、それゆえ身体と分割し得ない。²⁾

しかし靈魂は何にでも宿るわけではなく、人間の靈魂は人間の身体にのみ宿る。アリストテレスは「可能的に生命を持つ自然的物体」について「自然的で道具的な物体」と述べているが、自然的とは自然本性的に、すなわちそれ自身の内に運動の起源を有する種子的存在ということを意味し、また道具的とは生命活動に関する道具、すなわち心臓や肝臓といった諸器官を有するということを意味する。そのようなものとしてありうるのが胚から分割されて自ら生成される人間の身体であり、靈魂はこれにのみ宿るのである。

以上のような議論は一見抽象的な思考の産物であるかのように見えるが、アリストテレスは靈魂概念を単に推論から組み立てたのではなく、それを実際の生命活動における働き、能力として捉えているのであり、続いてその現実的な現れについて論じていく。靈魂の具体的な能力としてアリストテレスが挙げているのは、思考能力、感覺能力、栄養能力の三つである。栄養能力とは生殖及び成長、代謝の能力、感覺能力とは言うまでもなく五感の能力、そして思考能力とは感覺から想像(表象)を生じさせ、抽象概念から真理把握へと進んでいく能力である。

しかし例えば色という形相が単独では存在し得ないように、色という形相を感覺する靈魂の能力も単独では存在し得ず、現実態となるためには質料としての感覺器官を必要とする。靈魂の能力である「見る働き」は感

覚器官としての眼球と結びつくことで、初めて「視覚」となる。このようにアリストテレスにおいて靈魂は徹底して具体的な「能力」、「働き」として捉えられているのであり、それゆえに身体と不可分の存在とされるのである。

しかしここで問題が生じる。感覚は感覚器官が外界と接触することによって生じるが、複数の感覚器官で生じた感覚がいかにして離れた場所にある単一の統御中枢である心臓³に伝達されるのか、また靈魂がそのような座から動くことがないならいかにして身体各部に随意運動を生じさせるのか、という問題である。そしてここで靈魂と身体をつなぐ媒体として考えられたのがスピリトゥスという靈的物質であり、アリストテレスはその『動物運動論』で心臓に座す靈魂が同じく心臓内に存在する生来のスピリトゥス（内在的氣息）を用いて身体を動かすと論じている。しかしその理由としては「質的に変化せず膨張・縮小することができる」というスピリトゥスの本性と人体の運動との近親性が挙げられているだけで、十分な説得力があるとは言い難い。あくまで自然学者であり医学者ではなかったアリストテレスはこれらの諸概念を実際の人体の諸器官とその生理的機能とに関連づけてより詳細に論じることがしなかったが、この試みを実行し、その後一五〇〇年以上にも渡ってヨーロッパの医学理論を支配することになったのが古代ローマ時代のペルガモン出身の医師、ガレノス（一三〇頃―二〇〇頃）である。

ガレノスはその医学理論を構築するにあたり、ヒポクラテスやエラシストラトスといった先達の医学者とはもとより、エンペドクレスやクリュシッポス、プラトンなどの哲学者の学説も数多く参照しているが、特にアリストテレスの靈魂論と動物論にその多くを負っている。ガレノスもアリストテレス同様、靈魂を身体と不可分

のものとして考え、現実の人間の身体における諸活動を靈魂の諸能力の現れとして理解する。ただし医学者としてアリストテレスよりも数多くの解剖学的所見に通じていたガレノスは、自らの観察に基づき、特に生理機能として現れる靈魂の能力を解剖学的に局在化しようとした。具体的には、思考能力と感覺能力を分けたアリストテレスとは異なり、ガレノスはこれを共に靈魂の理性的部分として統御中枢たる脳に置く。これは真理への階梯として思考と感覺、人間と動物を序列化する必要のあった哲学者アリストテレスと、感覺と随意運動の源として生理学的に理解した医学者ガレノスの相違に基づくものであろう。そしてアリストテレスが栄養的能力とした第三の部分は「栄養的な力の道具である静脈の源」とされた肝臓に置かれた。

このようにして靈魂の諸能力の身体諸器官への対応関係、逆に言えば身体諸器官が道具として果たすことになる靈魂の諸能力について定めた上でガレノスが説くところの人間の生理システムは以下のようなものである。まず呼吸によって肺の中に流入した空気が肺静脈によって「本性的な熱の座」である心臓の左心室に送られ、⁽⁴⁾そこで熱によって精鍊されて生体機能のもとになる生命的なスピリトゥスに変えられる。当時一般的だった動脈精氣論と同様、ガレノスはこのスピリトゥスが動脈によって身体各部へと送られるとするが、特に脳底の網状動脈に送られたそれが脳室の中にスピリトゥスを吹き出し、そこで一層精鍊されることで精神的なスピリトゥスが生じる。最後にこの「動物の全感覺と随意運動のための靈魂の主要な道具」である精神的なスピリトゥスが神経系を通じて脳から全身に送られることで、感覺と運動を統御するのである。

ガレノスはこのようにして統御中枢としての靈魂と道具としての身体諸器官からなる人間に、スピリトゥス概念によって生理的統一性を与える。目的論的な視点に立つガレノスにとり、身体諸部分は独立して存在する

のではなく、あくまで一つの靈魂の諸部分としての連関のもとに捉えられる。ガレノスの医学はこのように脳に座する靈魂が身体諸部分をスピリトゥスという宗教的医学概念を通じて支配するというモデルを提示することで、靈魂の肉に対する優位を確保しつつもそれらが分離せずに統一される、という全人的な人間像を「科学的」に証明することができたのである。このガレノスの医学体系はその総合性と合理性のゆえにその後一七世紀に至るまでヨーロッパの医学界に君臨し続けることとなった。⁷⁾

二 スコラ医学におけるガレノス主義

以上のようなガレノスの医学理論はアラビア経由で西欧ラテン世界に逆輸入され、盛期スコラ学の世界において広く受け入れられたが、トマス・アクィナス（一二二―一七四）の人間論においてもこの医学概念としてのスピリトゥスは明白に承認されている。基本的にアリストテレスに負うトマスもまた人間を単に魂のみからなる存在ではなく、魂と身体から複合された存在として理解する。なぜなら、およそ自然物においては形相のみでなく質料もその本性的な定義に含まれるからであり、また魂の一能力である感覚的魂の働きは明らかに身体を必要とするからである。

しかし厳密な質料形相論の立場に立つトマスは「魂と身体との間に何らか媒介的な物体が存在すると考えた人々の見解がいずれも偽であることは明らかである」⁸⁾と述べ、魂と身体との合一における媒介者としてのスピリトゥスの役割を否定する。蠟と印形がそうであるように魂は質料の形相として無媒介的に身体と一つになっ

ているのであり、何らかの物體的媒介がこの両者の間に入り込むことは許されないとされるのである。

が、ここでトマスが述べているのはあくまで形相が質料の現実態として合一する際の媒介者の否定であり、実際の人間が身体を運動させる際の媒体としてのスピリトゥスの働きについてはその直後の部分ではっきりと承認されている。「魂は身体の粗雑な部分を繊細な部分でもって動かす。そして動かす力の第一の用具がスピリトゥスであることはアリストテレスの『動物運動論』に言うごとくである。」⁽⁹⁾すなわち、存在論の次元においては魂と身体とは無媒介的に結びつくものとされるが、運動その他の生理的な作用において魂と身体との媒介者となる医学的概念としてのスピリトゥスは受け入れられているのである。

スピリトゥスという名称は何らかのもの「繊細性 *subtilitas*」を表示すべく用いられ、だから物體的なるものについても非物體的なるものについてもそれは語られる。……かくしてまた、もつとも繊細な蒸発分 *vapores*—それによって魂の諸々の力が身体の諸部分にまで伝搬されるところのもの—もやはりスピリトゥスと呼ばれる。⁽¹⁰⁾

中世世界においてガレノス医学はほぼ唯一の体系的な医学理論として広く受け入れられていたと言えるが、ルネサンスに至るとスコラ医学のありようにも大きな変化が生じる。すなわち一般に医学革命と言われる、ガレノスを絶対視する医学からのある意味での離反の動きがそれである。一六世紀以降ヴェサリウス（一五一四—一六〇四）⁽¹¹⁾からハーヴィー（一五七八—一六五七）⁽¹²⁾に至るまで数多くの医学史上の発見が相次ぎ、それは今日に至

るまでの近代医学、近代科学に直接繋がっていくこととなったが、この医学革命（及びより広義の科学革命）に当たっては北イタリアのパドヴァ大学における知的伝統が大きな影響を及ぼした。

一五世紀から一六世紀にかけて、ヨーロッパにおける神学研究の中心となっていたのはパリ大学であったが、いわゆる神学からは一歩身を引いた世俗的アリストテレス主義、すなわち自然哲学や論理学などの分野でヨーロッパの知的中心となっていたのがこのパドヴァ大学であった。哲学研究、科学研究を通じてパドヴァの学風は経験主義、自然主義といった態度に特徴づけられるが、そこで範とされたのは自然哲学者、論理学者としてのアリストテレスだったと言える。このことは本論で扱う医学の領域においても同様であり、ヴェサリウスからハーヴィに至るまでの医学改革者たちは全員が熱心なアリストテレス主義者であり、ガレノス主義者であった。彼らはみなガレノスの体系を完全に破壊してその上に全く新しい自らの体系を打ち立てようなどとは夢にも思っていなかった。ただし彼らはガレノスの記述そのものよりも、むしろその研究方法に対して深い敬意を抱いていたのであり、それゆえガレノス自身の方法、すなわち観察と実験に基づく方法によってガレノスの体系を修正しようとしたのである。

それゆえ彼らの解剖学的な業績はある意味で人文主義者らが古典作家の著作に対して行った校訂作業と同様、ガレノスの著作に対する「医学的校訂作業」であったと言える。エラスムスがキケロに対してしたのと同様の精神を持ってヴェサリウスらはガレノスに対してしたのであり、彼らのガレノスへの敬意はルネサンスを通じてほとんど揺らぐことはなかった。それゆえ、ガレノスが豚や犬の解剖に従って類推した人体内の網状叢や、五つに分裂した肝臓など、部分的に誤った記述が人体解剖実験の結果によって「校訂」されることはあ

り得ても、その血管系や心臓の機能、感覚や認識の作用など、その体系的な生理システムに対する全面的な否定などはあり得なかつた。ルネサンスの医学革命において、ガレノスの体系は様々な修正を被りつつも、なおスコラ医学における聖典として君臨し続けたのである。

四 フィチーノと音楽精気論

一般にルネサンスは万能人の時代、諸説混淆の時代などと言われるが、このマルシリオ・フィチーノという人物の経歴にはそのようなルネサンスの複雑性が非常に色濃く現れている。一般にフィチーノはもっぱらルネサンスにおけるプラトン主義の復興者として語られるが、同時に彼はアリストテレス主義的なスコラ哲学に通じた職業的哲学者でもあつた。またフィチーノは叙階を受けたキリスト教の司祭であつたが、にも拘わらず彼は占星術師、⁽¹³⁾魔術師としてしばしば危うい作業を行つてもいた。しかし今日の観点からすると矛盾しているようにも見えるこれらの活動は、ルネサンス人フィチーノの中ではそのように捉えられてはいなかつた。フィチーノにとり、プラトン主義哲学も、キリスト教も、そしていわゆる魔術も、全て靈魂の天への上昇という彼の根本的な目的に資するものとして統一的に理解されていたのである。⁽¹⁴⁾

フィチーノの魔術的思想に関してはその『*De triplici vita*』と題された著作の中で特に論じられるが、フィチーノがこの書物において主題としているのが本論の対象であるスピリトゥスという概念である。このスピリトゥス概念に関して基本的にフィチーノはこれまで述べてきた伝統的な医学的概念としての

意味をそのまま受け入れている。それは呼吸によって肺に流入し、その後心臓で精鍊されることでより精妙な状態へと加工され、血液と共に身体各部へ配分される。そして特に脳に送られたスピリトゥスがそこでさらに加工され、感覚と運動の媒体として働く。スピリトゥスとは統御中枢としての靈魂が肉体を動かす際の道具、靈魂と肉体とを結びきらずなであるとするこのような伝統的な理解はフィチーノにおいても繰り返されている。

この『三重の生について』で論じられているのは、いかにしてこのようなスピリトゥスを健全な状態のまま保ち、さらにより優れた状態に導くのかという一種のスピリトゥス療法とでも言うべき問題である。フィチーノにおいてスピリトゥスは決して観念的に捉えられてはいない。それは肉体を育み、動かしているある意味で物質的な存在なのであり、それゆえ人間の活動に伴って消耗するとされる。しかしそのような活動によってスピリトゥスが消耗することがあるなら、反対に何らかの働きかけを行うことでそれを活気づけ、純化することも可能となるはずだとフィチーノは考える。しかもスピリトゥスが靈魂と肉体のきずなである以上、スピリトゥスを改善することは靈魂と肉体を改善することにも繋がる。すなわちスピリトゥスに働きかけることによって肉体を健康な状態に、靈魂を純粹で神的な状態へ導くことが可能になるとされるのである。

ここで問題となるのはそのための実際的な方法である。スピリトゥスが現実の活動によって消耗する物質的存在である以上、それを活気づける方法としても祈りや観想といったものではなく、より物理的な¹⁵あるいは魔術的な¹⁶手段が求められる。具体的にフィチーノが挙げているのはある種の食物や葡萄酒、香、神秘的な力を持つ鉱物や護符の利用などであるが、とりわけ音楽が持つ力がスピリトゥスを調律するにあたって重要なものとされた。

フィチーノは音楽が有するスピリトゥスへの強い影響力を、音楽を伝える空気とそれを受け取るスピリトゥスとの近親性に帰している。「空気の如き音楽は空気の如きスピリトゥスにとつて」非常に有益だとフィチーノは述べる。伝統的なアリストテレス的、ガレノス的な考えに従えば、音を受け取る聴覚に限らずあらゆる感覚作用においてスピリトゥスは媒体としての役割を果たすとされている。視覚であつても味覚であつても、感覚器官で得られた感覚を脳に座す靈魂に伝えるのはスピリトゥスであり、その意味では聴覚においてのみスピリトゥスが特権的な役割を果たすわけではない。しかしフィチーノにおいては耳の鼓膜の中に存在する空気とスピリトゥスが同一視されることで、聴覚とスピリトゥスとが他の感覚と比べより深く結びつくことになる。すなわち、他の感覚作用が感覚器官を仲介して行われるのに対し、この耳の鼓膜において空气中を伝わる音楽と人体内のスピリトゥスとは直接に触れあうのであり、それゆえ音楽はスピリトゥスに大きな影響を及ぼすとされるのである。

このようにしてスピリトゥスと音楽との直接的な接触という理論が語られるが、フィチーノはここからさらに一步を踏み出す。フィチーノはスピリトゥスを耳において音楽を受け取る空氣的な存在と見なすだけでなく、反対に音楽をスピリトゥスの存在として、すなわち一種の靈的生命体と見なしてしまうのである。音楽は空気が運動することによって生ずるが、これは靈妙なる空気すなわちスピリトゥスから構成される不可視の身体の運動と見なすことができる。加えて音楽には何らかの意味を有する歌詞を加えることが可能であるため、漠然とした印象しか伝えられない触覚や味覚などと異なり、明確な知的内容を伝達しうる。それゆえ、音楽は「温かい空気であり、息吹いてさえおり、ある程度は生きており、動物のように関節を備えた手足から成り、

動きや感情のみならず、知性のように意味まで帯びているので、いわば一種の靈妙な理性的動物だと言える」とフイチーノは論ずるのである。このような靈的生命体としての音楽が類似した存在である人間のスピリトゥスに大きな影響を及ぼすことは当然であろう。

このフイチーノの理論において、スピリトゥス概念は明らかに伝統的な医学的概念としてのそれとは一線を画する意味を与えられている。フイチーノにとり、スピリトゥスとは人間も含めた自然世界に遍在する靈的物質なのであり、それは例えば音楽などの形を取って容易に実体化しうる。それゆえ人間のスピリトゥスも音楽や食物、護符といった外部からの物理的な、しかしスピリトゥスを帯びた働きかけによって改善することができるし、そして最終的にそれは人間の靈魂の上昇をもたらすのである。これは一種の精氣魔術とも呼びうるが、自然世界に魔術的な力とスピリトゥスが満ちているとするこの思想は次節で扱うパラケルススによってさらに徹底的に主張されることとなった。

五 パラケルススと医化学派

すでに述べたように大学内の医学研究においてはガレノスの体系全体に公然と刃向かう医学者はほとんど存在しなかったが、反ガレノスという初の決定的な離反の動きは大学の外部で活動した実地の医学者の側から生じることとなった。その医者こそがフリップス・アウレオルス・テオフラストウス・ボンバストウス・フォン・ホーエンハイム、すなわちパラケルスス（一四九三—一五四一）である。¹⁷

パラケルススはスイスのチューリヒ近郊のアインジーデルンという寒村で医者の子として生まれた。その後九歳のころフィラッハへと移住したが、この地方は鉱産資源が豊かで多くの鉱山、精錬所があり、少年期のパラケルススはこれらの工房に出入りして採掘と冶金学を学び、ここで後年の錬金術的な知識と技術の基礎を身につけた。青年となったパラケルススはイタリアのフェラーラ大学に入学し、ガレノス主義医学を学んだが、博士号取得後は大学に留まることなく、ドイツ、フランス、イタリア、スペインとヨーロッパ中を渡り歩く遍歴の医者となった。この間、軍医や町医者として兵士や鉱夫など社会的地位の低い人々への医療活動に従事するかたわら、ジプシーや床屋、薬師といった人々から民間医療の知識を数多く吸収した。一時大学へ招聘されるも大学当局との衝突によりわずか一年足らずで罷免され、その後は当時宗教改革とその後の宗教戦争により混乱を極めたドイツ諸都市を転々とすることとなった。

パラケルスス研究の大家ゴルトアンマーは「パラケルススの場合ほど、学問的業績が個人的な生活や体験と密接に絡み合っている思想家は、特に彼以前にはほとんど存在しない」と述べているが、実際パラケルススのアリストテレス的、ガレノス的なスコラ医学に対する激しい敵意や、それに対抗して提示した新たな自然理解などは彼の生涯と深く関わっている。パラケルススには自然世界を思弁的、抽象的な思考で把握しようという発想はない。自然について考察する際、彼を導いていたのは精錬工房や錬金術の実験室での実験結果であり、また臨床医として活動する中で得られた経験であった。

神の御旨が行われることを願うのであれば、医者たるもの、言葉をもてあそぶことによつてではなく、

御旨が存在する場所にこれを捜し求めねばならない。医者(18)の身を助けるのは言葉ではなく、自然の光のみなのである。

バラケルススは小宇宙としての人間と大宇宙としての世界を含む自然全体を化学的な存在として、すなわち実験によつて蒸留、抽出、分離、結合などの変化を引き起こしうるような元素から成り立つものとして把握しようとした。例えば稲妻はもはや天の怒りではなく、火薬が硫黄と硝石で爆発するのと同様に空気性の硫黄と硝石の結合によつて引き起こされるものとして理解され、また山の清流などは地下水が火山熱によつて蒸留され、その蒸気が地上に達した結果生じたものとされた。いまや自然は巨大な化学実験室と捉えられたのであり、それゆえバラケルススに引き続く信奉者たち、すなわち医化学派 *iatrochemistry* は創世記で語られる天地創造すらも自然の化学的展開であると説明した。

しかし彼らの世界観や元素説は今日のような唯物論的な原子論に立脚するところのものではない。それはむしろ霊的な生命力 *spiritus vitae, lebensgeist* に充ち満ちた世界であり、そしてバラケルススはこのような世界が神の意志的な創造の結果であることを強く主張した。⁽¹⁹⁾ バラケルススにとり、世界創造とは神の自己表現、自己外化に他ならない。バラケルススにおける神はある意味で一つの永遠なる力であり、この中心的な力としての神が溢出し展開した結果、人間を含むあらゆる被造物が生じたとされるのである。

この神理解は同時代人の宗教改革者ルターのそれとは全く種を異にするものであり、明らかにフィチーノやアグリッパ(20)（一四八六—一五三五）といった人々の新プラトン主義的・ヘルメス主義的な思想と近親関係にあ

る。しかしパラケルススの神と世界に関する理解はそのような新プラトン主義的な観念とも明らかに異なっている。それは第一に世界創造を非人格的な諸原理の流出としてではなく、人格的な創造者としての神の自己表現、自己外化として点においてであり、また第二に創造の結果生じた物質的存在を神あるいは原初的存在に対立する存在と見なすグノーシス的な二元論的理解を取らず、反対に動植物や鉱物の中にさえ神のしるし *signatur* を認めるという神と物質的世界との近親性においてである。無論パラケルススも神即自然、自然即神とする一元論的理解は取らず、神と被造物としての自然世界とは厳密に区別されているが、しかしこの両者の間に断絶は存在せず、自然世界と神との直接的な結びつきは決して疑われることはない。

パラケルススはこの創造において世界の源泉となるものを大いなる神秘 *mysterium magnum* やイリアステル *ylaster* ⁽²⁾ と呼ぶが、それは世界のあらゆる可能性を潜勢的に含むところのカオス的な原質料とされる。この中からまず諸元素が生じ、それが宇宙へと、そして最後にあらゆる被造物へと分化していくこととなる。それゆえ人間も動植物も、さらには鉱物や水なども全て個別の神秘 *mysterium specialia*、すなわち神のしるしを帯びた神的存在とされるのである。

パラケルスス及び医化学派の医学理論には、このような世界創造に関する理解が大きく影響している。パラケルススは人間だけでなくあらゆる被造物が共通の原質料から生じた元素によって成り立つものとしたが、それゆえに万物は化学的な手続きによつて変化させることができるし、またそのような共通の元素によつて成り立つ万物は相互に影響を与えることもできる。よつて動植物や鉱物を服用することで人間の身体的な条件を化学的に改善するという方法を医学的な手段として採用することも可能となるのである。

古典古代及び中世における伝統に従い、バラケルススは万物を構成する諸元素を地水火風の四大元素と考えたが、さらにこの四大を形成するところの四大の第一物質 *prima materia elementorum* としてバラケルススは三つの原基的な存在を措定した。それが水銀 *mercurius*、硫黄 *sulfur*、塩 *sal* という三原質である。この三原質は今日の元素表におけるそのような現実が存在するところの物質と言うよりも、むしろあらゆる物質に内在して生命現象をもたらす潜勢力として理解されている。すなわちこの三原質は、生物であるか無生物であるかに関係なく、あらゆる物質に内在して生命力と精神とを、つまりスピリトゥスを付与するものとされるのである。人間も例外ではない。人間も含めた万物はスピリトゥス・ウイタエに満ちたある種の化学的合成物として捉えられる。

いわゆる錬金術 *spagiria* なるものはこのような元素説を背景としている。誤解されがちだが、錬金術とは決して金を作り出すことを目的とした学問ではないし、実際バラケルススもそのような試みは全く行っていない。確かに金は完全な金属として高い価値を与えられてはいるものの、錬金術とはあくまであらゆる物質が共通の原質から構成されている以上、何らかの働きかけを行うことである金属を別の金属に変成させたり純化したりすることが可能となるという信念に基づき、実際に化学薬品や合金を作り出そうとする技術であった。物質の根元的な単一性と可変性への確信に基づく錬金術思想は決して非合理的なものではなく、根本的な発想においては現代の原子論と大きく異なるものではない。

しかし錬金術を現代化学から見ると異質なものとしていているのは、やはりその生氣論的な発想である。すでに述べたとおりバラケルススの創造説において万物は全て神のしるしを帯びた神秘的な存在とされるが、錬金術は

万物に内在するこの神秘的な力アルカヌム *arcantum* を抽出して特殊な治癒力を持つ靈薬を作ることができるのである。有名な賢者の石 *Lapis philosophorum* や生ける水銀 *mercurius vitae* などは最高の段階のアルカヌムであるが、このような究極の形にまで加工できなくとも、スピリトゥス・ウイタエに満ちた万物に内在するアルカヌムは人間の生命に有益な影響を及ぼすことができる。自然世界に隠されているこれらの様々な治癒力を発見し、それを実用化することこそが錬金術師＝医者²²の使命とされるのである。

バラケルススの世界においてはあらゆるものが生きている。一切の存在者にはスピリトゥス・ウイタエが内在しており、動植物には動植物の生命が、金属にも金属の生命がある。このことは鉱物や鉱脈が動植物と同じく生成し、成長するという彼の経験的事実からも確信される。木も森も、鉱物も鉱脈も、自然界のあらゆる存在はその元素的なレベルからすでに生命活動を行っているのであり、そのような生命の恩恵から外れたものは存在しない。原初的存在たるイリアステルから四大とそれを形成する三物質が生じ、これが多様な存在へと分化してあらゆる生物や鉱物などが生まれる、とする階層的な秩序を想定することで、神から発出した自然世界は一つの完結した生命の奔流として捉えられるのである。

このことはまたバラケルススの病因論においても確かめることができる。⁽²²⁾ 伝統的なガレノス医学に従えば、人間は血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の四体液から構成されるものであり、この体液のバランスの乱れが様々な病気を引き起こすとされたが、バラケルススは病気を何らかの生命力を持つ種子的な存在が空気あるいは食物を通じて体内に入り込み、そこで成長することによって生じるものと理解する。それゆえ、病気を治療するには人間本来の生命的なスピリトゥスを強めてこの存在に対抗するか、あるいはこの存在に敵対的に働く別の何

かを使用・服用することが有効だとされるのである。現代の病因論および治療法がこの発想の延長線上にあることは言うまでもないが、それにもまして重要なのはパラケルススが病氣そのものを悪とは捉えず、あくまで二つの生命体の間で争いと理解している点である。病氣そのものは決して悪なものではなく、単に自身の生命活動に従事しているにすぎない。病氣は寄生された人間の側にとって相対的に悪となるのであって、それは人間や動物が他の生命体を犠牲にして生きているのと同様である。このようにパラケルススにとっては病氣すらも生命力という恩恵に浴す一つの生命体として、神による創造の秩序の内部に位置づけられるのである。

以上、このパラケルススの思想はガレノスの解剖学よりもむしろ生氣論的医化学に基づいたものであり、それゆえパラケルススの自然観、人間観においては伝統的なスピリトゥス概念の感覚と運動の媒体としての側面が軽視され、それはもっぱら生命の原理として語られることとなる。物質的世界の内部に存在する万物は神に由来する生命力を宿す存在として理解されるのであり、その錬金術思想も病因論も全て生命に充ち満ちた世界というパラケルススの根本的な確信を背景としている。

最後に、このような確信に立つパラケルススが死というものをどのように理解していたのかを見ていきたい。パラケルススにとり、死とは霊的身体と物質的身体、あるいは水銀と硫黄と塩という三原質の分離として理解される。死に際し、その物質的身体は滅び去り、それを構築していた諸元素へと分解していく。しかしパラケルススの世界ではそのような諸元素のレベルでも生命的な力は内在しているのであり、大地へと帰ったこの元素は再び何らかの生命体を構築していくこととなる。そして物質的身体から分離した霊的身体に関しては、キリスト教徒パラケルススはその死後における永遠性について何らの疑いも差し挟んではない。

六 結論

以上、本論ではスピリトゥスという概念を鍵としながら、その思想的な背景及びルネサンスにおける変容を分析してきた。ルネサンスはしばしば近代の始まりと言われるが、アリストテレスやガレノスに由来する伝統的な医学概念としてのスピリトゥスは人体内の生理システムを説明する科学的言説として公的に受け入れられていたのであり、それはルネサンスの医学革命においても基本的には変わらない。ルネサンス期の人々にとって、生命はもちろん意識や感覚といったものも決して観念的に捉えられてはならず、彼らの発想は人間の身体内や外的世界にスピリトゥスという生命原理・媒体が実際に存在しているという強固な確信に支えられている。そのような確信はスコラの世界においては慎重な医学的表現の水準に止められていたが、フィチーノやパラケルススといった大学外部の思想家、医学者はそのような立場を踏み越え、世界内に偏在する神秘的、魔術的な力ないし物質としてのスピリトゥスを声高に主張したのである。

ルネサンスにおける「人間の尊厳」の思想などを考える際にも、このことは念頭に置く必要があるだろう。このルネサンス期にフィチーノやピコをはじめとする多くの人々が人間の尊厳、すなわちこの世界における人間の特権的な地位と能力を称賛したが、彼らは決して人間以外の自然世界を無価値な存在と見なすような排他的な人間観を有していたわけではなかった。むしろルネサンス期の人々にとり、自然世界はスピリトゥスに充ち満ちた生命力溢れる世界なのであり、その意味で人間と対等の存在なのであった。ルネサンス期の人々はそ

のようなマクロコスモスとしての世界とミクロコスモスとしての人間とが連関しているという確信のもと、人間と世界に関する数々の創造的な理論を生み出していったのである。

思想史家、科学史家であるA・コイレは「もはや我々のものではなくてしまった思想の研究に取りかかる際に最も困難なこと、そしてまた最も必要なことは、……問題になっている思想家が知っていて我々が知らないことを学ぶことなのではなく、我々が知っていること、あるいは知っていると思いこんでいることを忘れることなのである」⁽²³⁾と語っている。歴史研究とは基本的に他者を扱う学問である。ルネサンスに生きる人々とその思考法は我々のそれから大きく隔たっており、彼らを理解するためにはたとえ不完全ではあっても「我々が知っていることを忘れ」ねばならない。しかしそのようにして他者を理解することとは彼らを我々から区別する一切のものを識別することであり、それは逆説的に我々を彼らから区別する一切のもの、我々自身を自覚することに繋がる。それゆえ歴史上に現れる他者とは我々自身を理解するための鏡となる。それは我々が自己を相対化するための視座を与えてくれる。本論で扱ったルネサンスに至るまでの「科学」的言説も、無論今日の観点からすれば錯誤に満ちた異様なものであり、それ自体は到底現代社会に生きる人間が無条件で受け入れられることができるものではない。しかしそれがある種の合理性を備えた一つの可能性、選択肢であったことは確かであり、それを理解することは今日の我々の生命観ないし科学全体もまた一つの可能性、選択肢であって唯一絶対のものではないことを強く自覚させる。そしてそれはまた生命観に関する新たな地平を切り開く一つの契機とも成りうるのではなからうか。

- (1) このように魂と肉体とのきずなどとしてのスピリトゥスは近代以前の生命論、心身論などを考慮する際非常に重要となる概念であるが、管見の及ぶ限りそのような医学的概念としてのスピリトゥスに関する研究は全体に少なく、特に日本ではほぼ皆無に近いように思われる。これは恐らく神学の分野では肉と対比された「霊」としてのスピリトゥスが、哲学の分野では思考、認識の座としてのアニマがそれぞれ研究の対象となることはあっても、医学的概念としてのスピリトゥスがあまり研究者の興味を引かなかつたためと思われる。また医学史の分野でも、このスピリトゥス概念は誤った迷信に基づく前近代的な医学概念として記述されることはあっても、それ自体が考察の対象とされることはまれである。
- (2) 靈魂を身体の形相とするこの説は、一三一一年のヴィエンヌ公会議において信仰箇条となつてゐる。
- (3) アリストテレスは靈魂の座を心臓と考えていた。その理由としては胚の分化における発生の順序や情動の影響を受けやすい点などのほか、身体の動者は不動の中心に座さねばならないから、といった論拠が挙げられている。
- (4) ガレノスの体系においては、血液は肝臓で生成され、そこから静脈を通じて身体各部に運ばれるとされる。しかし肺循環や体循環という概念がないガレノスの理論は、いかにして心臓の左心房と左心室、それに全身の動脈にこのスピリトゥスを帯びた動脈血が到達するのかをこのままでは説明できない。それゆえガレノスは左心室と右心室の間の隔壁に心室間隔小孔という目に見えない小さな孔が開いており、この孔を通じて肝臓から右心室へとやって来た静脈血が左心室に移行すると考えた。このような不可視の孔という理論は一見奇妙に映るが、発想としては不可視の毛細血管を通じて動脈から静脈に血液が送られるとする体循環の理論と大きく異なるものではない。
- (5) 血液の体循環と肺循環が解明されたのは一七世紀のことであるが、それ以前は動脈系、静脈系共に開管として

理解されており、その機能についても不分明な点が多かった。動脈精氣論とは動脈内に血液はなく、スピリトゥスのみが身体各部に送られると考えるエラスシトラトスらの医学理論であるが、ガレノスは解剖実験に基づきこれを否定し、動脈内の血液の存在を実証した。しかしガレノスも動脈内にスピリトゥスが存在していることは認め、静脈は血液のみを、動脈は血液とスピリトゥスの両方を運ぶとした。

(6) 豚の脳底に存在する動脈網。人体には直接対応するものは存在しない。

(7) 一二三二年神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世は中世最初の行政法典とも言われる『アウグストゥス書』において今日の医師免許に相当するものに言及し、その中で免許取得に必要な医師教育にまで踏み込んで以下のように規定している。いわく、*「* 医術を実行する許可を得るためには（当時医学の中心地だった）サレルノ大学の教授連から与えられた証明書が必要となること。そしてその証明書を得るための五年間の教育課程においては教材としてガレノスのそれが用いられねばならないこと、等である。これらのことが国家権力によって明文化されることで、ガレノス医学はまさしく聖典としての地位を獲得したと言える。*」*

(8) 『神学大全』第一部第七六問題第七項「魂が動物の身体と一つになるのに何らかの物体の媒介を要するか」
(9) *ibid.*

(10) 『命題論集註解』第一卷第一〇区分第一問題第四項主文。

(11) ヴェサリウスの業績として一般に認められているのは、何か新たな学説を創始したというようなことではなく、医学研究のために自ら解剖学的な執刀を行ったというその方法論の面である。一般にスコラ医学における解剖学の授業風景とは、講壇の上で教授がガレノスのテキストを読み上げ、その下で理髪師が検体の解剖を行うというもので、医学教授が自ら執刀を行うことはなかった。彼らは実際の解剖的な知見には通じておらず、あくまでガレノス医学を通じて人体を理解していたが、これに対してヴェサリウスは自ら人体解剖実験を行い、ガレノスの誤謬のいくつかを糾すこととなった。

(12) ハーヴィの出身はイギリスだが、パドヴァに留学してそこで医学教育を受けたため、学派としてはヴェサリウスらに連なるものと理解される。その最大の業績とされるのは体循環、肺循環を含めた血液循環システムの解

明で、これはガレノス体系に対する最初の大きな挑戦となった。

- (13) 天上すなわち星辰の世界がこの物質的世界に影響を及ぼすとするいわゆる占星術的な発想は、ルネサンスにおいてはごくありふれたものであり、知識人であろうと聖職者であろうと、星辰の影響を全く認めないような人物は当時においてほとんど存在しなかった。無論、星辰の運行によって人間の行為も含む未来のあらゆる事柄があらかじめ決められているとする決定論的な占星術は明らかに異端であり、フィチーノやピコといった魔術的傾向を持つ人々もこのような極端な占星術には反対したが、しかし例えば疫病の流行や特定の人物の気質などを説明するために星辰の影響を持ち出すような節度ある占星術については多くの人々が理解を示していた。それは一つには人間も含め万物の霊的な身体は本来天界に由来するものだからであり、また二つには星々の動きが物質的宇宙全体への働きかけによって生じたものである以上、その内部に存在する人間も含めた物質的存在は全てその影響を受けざるを得ないからである。このようなミクロコスモスたる人間とマクロコスモスたる宇宙との連関に対する確信はルネサンスにおいて広く認められる。

- (14) いわゆる古代神学 *prisca theologia* の伝統はフィチーノのこのような確信を証拠立てるものだった。この伝統に従えば、モーセ、ヘルメス・トリスメギストス、ゾロアスター、オルフェウス、プラトン、シビエラなどの教説は全て単一の宗教的伝統から発した連続的なものと捉えられる。

- (15) フィチーノのような一つの世紀を代表するほどの哲学者がこのような魔術的な理論を扱っていることは現代の読者からすれば奇妙なことのように映るかもしれないが、当時にあつてはこのようなテーマは珍しいものではなかった。実際、一七世紀に至ってもなお様々な事物における魔術的力の実在は多くの知識人によって信じられていたのである。

- (16) フィチーノの音楽論に関してはD・P・ウォーカー「ルネサンスの魔術思想」(一九九三)を参照。

- (17) 以下で述べるパラケルスの学説なるものは、正確には彼の死後におけるパラケルスス派の学説と言ったほうが良いかもしれない。パラケルスの著作は生前ほとんど公刊されることはなく、その膨大なテキストは死後彼の信奉者となった一群の医学者・錬金術師たちによって編集・出版されることとなった。それゆえ今日残つ

ているパラケルススの体系なるものは場合によっては相互に矛盾を含むことすらある非常に錯綜したものとなっている。

(18) 『聖ヨハネ草について』、一〇—一頁、『キリスト教神秘主義著作集16』所収。

(19) アリストテレス主義の世界観と神の意思的行爲としての世界創造説との間の緊張関係は常にアリストテレス主義者を異端とする危険性があったが、パラケルススもアリストテレス的、ガレノスのな学説を攻撃する際にこの問題を取り上げている。

(20) ドイツの神秘思想家、医者。「オカルト哲学」などにおいてフィチーノに強く影響された新プラトン主義的な魔術理論を展開した。

(21) ギリシア語のヒュレー（質料）とアストルム（天体）の合成語。天上の原質料といった意味。パラケルススはこのような造語を数多く生み出した。

(22) パラケルススの病因論に関してはA・コイレ『パラケルススとその周辺』（一九八七）一五一頁以下を参照。

(23) *ibid.*, p.115

（ひるま・りょうへい 東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程）

The idea of spiritus and life in Renaissance

Ryohei Hiruma

In this paper I examine the views of human being and life in Renaissance period by analyzing their idea of “spiritus”. In the traditional discourses of human being, classical understanding that catches man as the existence which constructed from spirit, soul, and body was general until Renaissance. While the soul meant the character or identity of man, the spirit meant non-character principle of human being, which was the external principle originated from the god or supernatural being and gave intellects and lives. Then the idea of “spiritus” was used not only in such religious contexts but also in quite different ones. For instance, they are the following usages in *“De triplici vita”* of Marsilio Ficino who was one of the greatest philosophers in Renaissance.

“Only the priests of the Muses, only the hunters after the supreme good and truth are so negligent and so unfotrunate that they seem utterly to neglect that instrument by which they can, in a way, measure and grasp the whole world. An instrument of this sort is the spirit, which by physicians is defined as a certain vapour of the blood, pure, subtle, hot and lucid. And, formed from the sbtler bllood by the heat of the heart, it flies to the brain, and there the soul assiduously employs it for the exercise of both the interior and exterior senses. Thus the blood serves the spirit, the spirit the senses, and finally the senses reason.”

In this text Ficino discussed and praised the spirit as medical idea, which is the material existense that deeply influences man’s physical body and soul, and it works as a medium that ties the sense organ and the brain, the

body and the soul; it is the first instrument of incorporeal soul, an instrument for sense perception, imagination and motor-activity. The medical idea of spiritus, which originated with Aristotle's natural philosophy and Galen's medicine, ruled the medicine of Europe through Middle Ages and Renaissance. By analyzing the idea of spiritus of Ficino, Paracelsus, and other Renaissance texts, I examine the vitalism of Renaissance that based on the convince of the vivid relationship between man and world.